

南チロルのドロミテ・ラディン語の母語継承

——イタリア語とドイツ語の狭間で——

Inheriting the Dolomites' Ladin Language in South Tirol,
between Italian and German

大澤 麻里子

Mariko Osawa

Abstract *The Ladin language is one of the regional languages in Italy. Its origin can be traced back to the time when Romans inhabited the Alpine region. It is also one of the three legally-recognized languages spoken in South Tyrol in Italy, where only 4.5 percent of the people speak Ladin. Even though the number is relatively small, thanks to the unique plurilingual educational system, the number of speakers of Ladin remains as it was 10 years ago and is still vital in everyday life.*

The purpose of this paper is to examine how this small area is considered to be one of the most successful multilingual communities in Europe where majority of the populations fluently speak three languages, namely Italian, German and their mother tongue Ladin. Second, the paper also inspects how to retain their mother tongue even though they are always confronted by two dominant and influential languages, specifically German and Italian. Finally, this paper also aims to investigate, in particular, how plurilingualism is applied and practiced in their educational systems.

This study is divided into two main parts. The former explains geographical, historical, legislative and economic background of the area. By interviewing local authorities, visiting various schools and institutions, and observing several classes in Ortisei, a small town which is the center of the Ladin community, the latter analyzes the role of plurilingualism in their educational system, including the current problems it faces such as the growing number of immigrants and the increasing demand for English.

キーワード 複言語主義、言語教育政策、母語継承

学際領域 言語教育学、言語政治学

0. はじめに

本稿では、イタリアのトレンティーノ＝アルト・アディジェ州ボルツァーノ県で話されているドロミテ・ラディン語を取り上げる。ボルツァーノ県においては、大言語であるドイツ語とイタリア語の狭間で、ドイツ語やイタリア語への同化の危機を何度も乗り越えてきた地域少数言語である。現在、話者数は微増しており、ボルツァーノ統計局（ASTAT）が2004年に行った言語意識調査¹⁾によると、94.9%の

ラディン語系住民がラディン語を読んで理解し、その割合は特に若年層で増加している。また、ラディン語話者地域の80%の家庭ではラディン語が使用され、母語継承が高い割合で行われている。実際にラディン語圏の中心的な都市であるオルティセイの街中を歩くと、商店、郵便局、書店、レストラン、カフェなどでラディン語が日常的に使用されている。また、前述の言語意識調査²⁾によると「ラディン語の未来は？」という問いに対して「もっとラディン語を話すようになる」と答えた人々は21.2%、「現状維持」と答えた人々が44.5%と、合計65.7%がラディン語の将来を悲観的には見ていない。このようにラディン語の継承がこの地域で一定の成果を挙げている要因は何なのだろうか。

ボルツァーノ県においてラディン語話者は人口のわずか5%にも満たないマイノリティの中のマイノリティであるが、ここ70年の歴史を概観すると、母語継承に有利に働く分岐点がいくつかあった。まず1つ目は、戦後の早い段階でラディン語教育が導入され、山村の農村地から国際的な観光地への大転換を遂げた事、2つ目は1972年に新自治基本法が制定されたことにより、広範な自治とラディン語の言語と文化に関する権利の大部分が保証されたこと、そして3つ目は、1980年代以降、欧州において、少数言語の保護政策が活発化³⁾し、また、1990年以降、欧州で複言語主義が提唱されると、時流にのった形でEUの「母語+2言語教育」の複言語教育のモデルケースとして、地域内外からその教育法と成果について注目され、欧州の言語政策上の大きな変化の中で活力を得ることとなった事が挙げられる。

本稿では、特に3番目にあげた、欧州の複言語主義と複言語教育の発展が、どのように地域の地域言語教育と複言語教育に影響し、どのようにラディン語の母語継承の位置づけが変化したのかについて、ボルツァーノ県の他の言語集団との関係性・パワーバランスを考慮しながら、統計局のデータや実地調査も含め考察する。またそれらを踏まえて、現在の問題点および、今後の展望についても検証する。

1. ボルツァーノ自治県におけるドロミテ・ラディン語

ドロミテ・ラディン語 (ladin de la dolomites) とはスイスのグラウビュンデン州で話されているロマンシュ語や、フリウリ・ヴェネツィアジュリア州で話されているフリウリ語と共にレト・ロマンス諸語 (図1) の下位方言の1つである。アルプスの先住民であるレティア人の言語を基層言語とし、ケルト語、レティア語の語彙⁴⁾、音声学的、統語的特徴は残しながらも、紀元前15年のローマ帝国の侵攻⁵⁾、その後400年に亘るローマ帝国支配によって俗ラテン語の影響を大きく受けて誕生

1) Barometro linguistico dell'Alto Adige 2004 : 233

2) Barometro linguistico dell'Alto Adige 2004 : 234

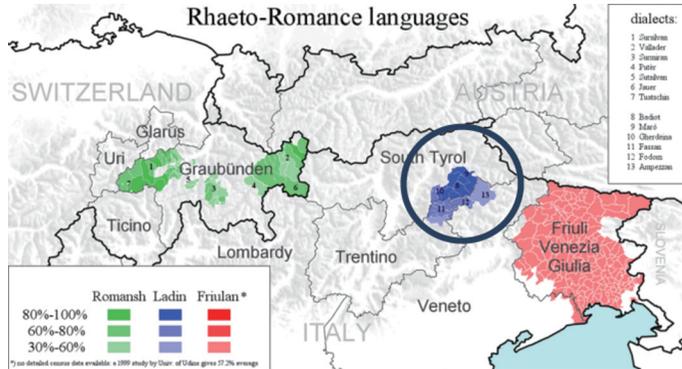
3) 1982年には低頻度使用言語事務局の設立、1992年には欧州審議会によって「欧州地域語少数言語憲章」が採択された。

4) 例えばアルプスの語彙と呼ばれる baràntl (ムーゴ松)、brènta (= 桶、たらい)、crèp (岩)、dàscia (= モミの木の小枝)、ròa (雪崩) など、現在でもその当時の語彙の痕跡を留めている。

<http://www.provincia.bz.it/intendenza-ladina/temi/lingua-identita.asp>

5) ローマ帝国2代目皇帝ティベリウスとその実弟ドルススに攻め込まれた。

した言語である。現在の話者数は約30,000人であり、ドロミテ山塊を取り囲むように位置する5つの渓谷に話者が居住している。行政区としては、自治権の度合いが異なる3県、トレンティーノ＝アルト・アディジェ州のボルツァーノ県とトレント県、ヴェネト州のベッルーノ県に分割されているため共通の施策を行うことは難しい。本稿で取り上げるのは、このうちボルツァーノ県のドロミテ・ラディン語である。現在のラディン語は距離的な近接性からイタリアのロンバルディア方言、ヴェネト方言、イタリア語、ドイツ語などの影響を受けている。



丸枠内がドロミテ・ラディン語話者地域

http://upload.wikimedia.org/wikipedia/commons/5/5a/Rhaeto-Romance_languages.png

図1 レト・ロマンス諸語の分布

ボルツァーノ県はイタリアの最北端に位置する自治県であるが、オーストリアとイタリアの狭間にあり、国境線を巡る係争の地であった。このような歴史的な経緯からラディン語系、ドイツ語系、イタリア語系の住民が共存している。ボルツァーノ県は自治県として、ほぼ特別自治州と同格で、国の法制度から独立した政策を実施することが可能で、法律、行政、財政、教育等の分野で特別の権限を与えられている。また、歳入の90%を県内で使用することができ、特に財政的に恵まれた県であるといえる。

ラディン語系グループは、現在は、同県において他の言語グループとはほぼ同等に近い権利⁶⁾を享受しており、ラディン語は、メディア、地域行政、教育、行政サービス、地名などでの言語使用が保証されている。ラディン語は、国家レベルでもイタリアの歴史的少数言語として法的に保護⁷⁾されている。また、ボルツァーノ県には、クォータ制と呼ばれるイタリア語系、ドイツ語系、ラディン語系住民の人口比率による公職の割り当て制度がある。

2011年度のASTATの人口統計(表1)によると、言語集団別の人口比率はイタリア語系25.84%、ドイツ語系69.64%、ラディン語系4.52%となり、2001年度の統計結果より0.2%増で、ラディン語系人口は若干の増加が見られる。ドイツ語話

6) 地名問題は未解決の問題として残っている。(山川 2002: 177-181)

7) La legge 482/1999 Norme in materia di tutela delle minoranze linguistiche storiche

者地域はボルツァーノ県全域に広がり、イタリア語話者はボルツァーノ市など都市部に集住し、ラディン語は、トレンティーノ県、ヴェネト州と隣接する8市で多数派となっている（図2）。文化的・歴史的にはチロルとしてドイツ語圏との親和性が高く、言語的にはイタリア語により近い。

表1 言語集団別人口比率

	ラディン語系	ドイツ語系	イタリア語系
2001年	18,124(4.32%)	290,774(69.38%)	110,206(26.30%)
2011年	20,126(4.52%)	310,360(69.64%)	115,161(25.84%)

(astat info Nr.17/2002, astat info Nr. 38/2012 を基に筆者作成)



緑 = ドイツ語話者地域 青 = ラディン語話者地域 赤 = イタリア語話者地域
http://upload.wikimedia.org/wikipedia/commons/b/b0/Loungue_disfribution_in_South_Tyrol_and_Trentino.png

図2 トレンティーノ＝アルト・アディジェ州における2011年の言語別分布図

県内103市のうち8市でラディン語が多数派となっており、平均すると80%程度の家庭でラディン語が日常的に話され、かなり均質化した言語人口を維持している。ラディン語の話者はガルデーナ渓谷（Gherdëina）とバディア渓谷（Badia）の2つの地域の集落に集住しており、標高2,137mのガルデーナ峠によって物理的に隔てられているため、現在のように道路が整備されるまでは往来が容易ではなかった。そのため、2つの地域のラディン語はガルデーナ方言、バディア方言として独自の発展を遂げた。これら2つの地域では異なる書記法を採用しており、教科書、文法書、辞書、出版物などは全て2変種で表記されている。伝統的な産業は農業と木工工芸（木工細工・木工彫刻）であるが、第二次世界戦後の観光産業の発達に伴い、スキー、トレッキング、山登りなどの拠点として飛躍的に経済発展を遂げ、現在は国際的な観光都市として多くの観光客を惹きつけている。

2. ラディン語、オーストリアとイタリアの狭間で

2章では、ラディン語地域の教育制度の変遷を軸に、どのような歴史的要因がラディン語に影響を及ぼし、ラディン語の衰退を促す要因となったのか、また第二次世界大戦後、どのように現在の教育制度が確立されたのかについて概観する。

2.1 オーストリアの支配下で

この地域は、1363年から1919年まで実質的にオーストリアの支配下におかれたため、行政の言語はドイツ語、教会の言語はイタリア語⁸⁾、日常生活の言語はラディン語であり、領域によって3つの言語が使い分けられていた。1774年には、ハプスブルク家の統治者マリア・テレジアによって、男女問わず6歳から6年間の学校教育を保障する義務教育制度が導入され、主にドイツ語による教育が行われた。ラディン語は学校教育では補助的な役割しか与えられず、イタリア語はほとんど使用されなかったが、住民からの希望により、1893年にはバディア渓谷で初めてイタリア語が週5時間導入された。この当時、既に現在の複言語的な学校の原型が存在していたのである。しかしながらその後、中央集権化を強める政府からイタリア語導入に対する批判を受けて学校からイタリア語が排除された。1916年になるとバディア渓谷、ガルデーナ渓谷ともにドイツ語化が推進されるようになった。

2.2 ファシズムとイタリア語化政策

1918年に第1次世界大戦が終結すると、大戦中イタリアが連合国側と秘密裏に交わした「サン・ジェルマン平和条約」により南チロルはイタリアに割譲される事となった。今までのドイツ語化政策から一転して、今度はイタリア語化政策が展開される。

1921年になると学校教育ではドイツ語が全面的に禁止された。ファシズムが台頭すると、ラディン語はラテン語起源であることからイタリア語の一方言だとみなされ、言語としての扱いを受けず、同様に、ラディン語話者もイタリア人だとみなされ、さらにイタリア語化政策が進められる。地名もすべてイタリア語に変更された。

この時期、5つの谷に広がるラディン語圏は、ファシズム政権下で、行政区として3県に分断され弱体化が進んだ。その後、ラディン語圏全体として自治権が与えられることはなく、現在もこの分割状態は残されたままで、ラディン語話者にとっては、ラディン語圏全体としての自治権獲得が悲願となっている。

当時ラディン語圏の学校にはイタリア各地から若くて経験の浅い教員が送られ、同時にそれまで地域で教えていたラディン語系教員はイタリア語での教育が保証できない事を理由に解雇され、イタリアの各地へ転任させられた。

ファシズム体制が、イタリア語化への弾圧を強めていく中、1939年にはムッソリーニとヒトラーの合意により、国籍選択（*opzione*）が行われることになる。こ

8) 国家が介入する前、教育を担っていたのは教会であり1550～1600年、1700年以降は地区の司祭はイタリア人であった。(Verra 2007: 6)

の国籍選択とは、先祖代々の土地である住み慣れた故郷を選んでイタリア人になるか、ドイツへの移住を迫るものであった。当初は、ムツリーニもラディン語をイタリア語の一方言とみなして、イタリア側に取り込むことに執着していたにもかかわらず、今度はラディン語話者を「異言語」集団と見なし、ドイツ語系住民と同様、国籍を選択する事を強いたのである。ガルデーナ溪谷やバディア溪谷のみならず、県境の南側に位置するリヴィナロンゴやアンペッツォの住民までが国籍選択の対象となった。ガルデーナ溪谷の住民は文化的に親和性の高いドイツへの移住を選択するものが80%と大多数であったが、それ以外のラディン語地域ではイタリアに留まることを望む人々が多数派であった（バディア溪谷では36%が移住を希望）。どちらを選択するのかによって、親戚や友人間でも対立が生まれ、コミュニティ内に大きな亀裂が生じた。この時期2000人のラディン語系住民が実際に故郷を離れてドイツへと移住した。

1940年になると、ドイツへの移住を選んだ住民の子どもたちにも、ドイツ語で教育が行われる学校が用意され、イタリアに残ることを選択した住民の子ども達はイタリア語のみで教育を行う学校へ通学することとなった。その後、ムツリーニが失脚してイタリアが連合国側につくと、1943年から1945年まで今度はナチスによるドイツ語化が急激に推し進められることとなった。イタリア語は全面的に禁止され、全教科がドイツ語で教えられることとなった。ここでも、ラディン語が学校のカリキュラムに入りこむ余地はなかったが、ファシズム期との大きな違いは、ラディン語地域の地元の教員が補助教員として採用された事である。またファシズム政権下では全面的に禁止されていたドイツ語を20年ぶりに学べることとなり、イタリア語化からドイツ語化への180度の転換を歓迎するラディン語系住民も多かった。

2.3 新しい教育システムの導入

ナショナリズムの高揚と2つの大戦により、強制的なイタリア語化、ドイツ語化という政治的抑圧を経験し、自らの文化や言語を否定され、あるいは無視され続けた状況を第二次世界大戦後、ようやく脱したラディン語地域であったが、ラディン語圏の学校をどのように立て直すかは、ラディン地域の命運を分ける大きな課題であった。特に教育言語を何語にするのか、どのようにラディンの文化や言語を教育にとり入れるべきかについて住民間で大論争が巻き起こり、大多数が賛同する案を見出す事は難しかった。1945年に、バディア溪谷の集落では、4人の市長と地域のカトリック司祭が集まり「イタリア語とドイツ語を同時間数学び、ラディン語も教育に取り入れる」という、イタリア語・ドイツ語どちらにも与せず、そして同時にラディンのアイデンティティを形成するための、ラディン語圏ならではの新しい教育モデルを提唱した。しかしながら多くのラディン語系住民は、ファシズム期の圧政の記憶から、新生イタリア政府に対しても、大きな不信感を持っており、イタリア語を教育言語として取り入れること自体を不満に思い、学校がまたもやイタリア語化されるのではないかという懸念を抱いていた。南チロル人民党の政治家、市長、神父、南チロル人民党員の教員などを中心に、授業言語をドイツ語と定めたドイツ

語学校と同様のモデルを選択するべきであるという声は大きく、ラディン語話者の中には、ラディン語は田舎言葉であり、学校教育に取り入れる価値がないので、ドイツ語を学ぶほうが良いというドイツ語推進派もいた。それに同調するメディアが拍車を掛け、「2言語+ラディン語」の新しい教育モデルは、どの言語の習得も中途半端になるのではないかとの批判にさらされた。一方、数は多くなかったが「2言語+ラディン語」案を支持する住民もいた。設立されたばかりの Union di Ladins という文化協会もラディン語話者集団の自律性を向上させるためのキャンペーンを展開し、ラディン語文化と言語維持のために「2言語+ラディン語」案を支えた。また、この新しい教育モデルは、特にラディン語圏が完全にドイツ語化することを快く思わないイタリア公教育省やキリスト教民主党など、域外からの擁護を受け、当初は、ラディン語圏にイタリア語の学校を設立しようとしていた公教育省のゴンネッラ (Gonnella) 大臣が、支持派に回ったことから、この運動は「2言語+ラディン語」モデルへと大きく傾いた。1948年には、トレンティーノ＝アルト・アディジェ州は、自治州となり、特別自治法によって、イタリアの通常の州にはない自治権が付与された。その中には教育に関する項目も含まれており、イタリア語系とドイツ語系の学校では「母語の尊重」のために、母語で教育が行われる学校をそれぞれ設立した。一方ラディン語話者地域では、上記にあげた「ドイツ語・イタリア語均等型バイリンガル教育+ラディン語」モデルが1948年に導入された。導入当時、このモデルはラディン語系の子弟に対する教育的配慮や確固たる教育理念から選択されたというよりは、政治的、社会的、経済的、文化的、妥協の産物⁹⁾であった。教授法も教材も整備されておらず、教員にとっても全てがゼロからのスタートであったが、1953年には中等教育でも均等型バイリンガル教育が導入され、またラディン語の授業も正規科目として教えられるようになり、カリキュラムが少しずつ整備されていった。1972年に新自治法が施行されるとボルツァーノ県に多くの権限が移譲された。学校教育におけるラディン語を教える権利が明文化され、ラディン語は補助的な言語ではなく、地域の伝統文化を継承するための権利として位置づけられるようになる。1975年にはラディン語教育委員会が、1987年にはラディン語教育研究所が設立されたことによって、より地域の実情に沿ったラディン語話者のための教育を支援する体制が整った。しかしながらラディン語系学校のための教員養成プログラムの誕生は、1997年にボルツァーノ自由大学が設立されるまで待たなくてはならなかった。その後、2001年に中学校に、2006年には小学校に英語教育が導入され、現在はラディン語、ドイツ語、イタリア語のみならず、英語が加わり、4言語を学ぶ学校となっている。

通常、1つの支配的な大言語と地域の少数言語が同じ地域で話されている場合、たとえ法的保護や具体的施策が整備されていたとしても、地域言語は圧倒的な力を有する支配的な1つの大言語に同化・移行する力が強く働く。ラディン語話者は第

9) Rifesser (1994: 16)

第二次世界大戦後の早い段階からドイツ語とイタリア語という地域の2つの優勢言語を均等に学校カリキュラムの中に取り入れる選択をしたおかげで、どちらかの大言語へ同化するという危機を回避し、現在に至るまでラディン語の継承を可能にしたといえる。

表2 ラディン語地域における義務教育課程における教育言語の変遷

	ドイツ語	イタリア語	ラディン語	英語
→1916	■		■	
1916～1921	■			
1921～1943		■		
1943～1948	■			
1948～(小学校)	■	■	■	
1953～(中学校)				
2001～(中学校)	■			
2006～(小学4年)				■

出典：Rifesser (1994：11) を基に筆者作成

3. ラディン語と教育

学校教育は、前章の教育史を概観した上でも明らかなように、地域言語の弱体化を引き起こす要因ともなりうるし、維持するための決定打ともなりうる。学校教育が少数言語に与える影響が大きいのは、多くの研究者が指摘するところである。アジェージュも(2004：252)被支配言語を教える学校を設立することは、その言語を守るための決定的なステップとなりえると指摘する。第3章では、ラディン語地域の学校制度と教員養成、学校に対する満足度について他の言語グループの状況と比較しながら考察する。

3.1 幼稚園・小学校・中学校

ボルツァーノ県では、それぞれの言語グループの母語による教育を保証¹⁰⁾するために、3つの言語グループがそれぞれ異なる学校制度、教育委員会、教育研究所を擁する。ラディン語系の学校では前述のとおり、イタリア語とドイツ語を同時間数教える均等型バイリンガル教育プラス週2時間のラディン語教育が行われ、一方、イタリア語系、ドイツ語系の学校では、イタリア語、ドイツ語が主な教育言語として使用され、それぞれドイツ語とイタリア語は第二言語として教科科目となっている。イタリア語系の実験校を除くと、均等型バイリンガル教育は行われていない。このシステムの違いは、後述する各グループ間の言語習得度の差に大きく影響を及ぼしている。

2012/13年度のASTATの統計によると、ボルツァーノ県全体で24,786人の学齢

10) 「ボルツァーノ県においては幼児、初等、中等教育における授業は生徒の母語で行われる。」(1972年自治法第19条)

期の子どものうち、72.6%はドイツ語系、22.7%はイタリア語系、4.6%はラディン語系の学校に通学している。ラディン語系の学校に通う生徒数は以下に挙げるように高校まで合算しても、2,600人弱であり、1クラスあたりの人数は、約15人と小規模なのが特徴的である。全体的に統括しやすい規模であることも、ラディン語系の学校の強みとなっているが、教材開発や単元開発なども一人ひとりの教員の手にかかっており、負担は大きいという。

表3 ラディン語地域の学生数（2011年度、2012年度）

	2011/12	2012/13
小学校	1281	1288
中学校	846	821
高校	454	483
合計	2581	2592

出典：Aules 2013 “Suze’s scolastich”

ラディン語の教育は1972年自治法第19条¹¹⁾によって保証されており、領域性の原理に基づきラディン語地域の学校にのみこの法規が適応される。ラディン語地域では、幼児学校から、ドイツ語とイタリア語、ラディン語が教えられ、そして小学校4年生からは英語が教科として導入される。ラディン教育委員会発行の小冊子¹²⁾によるとラディン語系学校の目的は「ラディン語とラディン文化の保護と発展とドイツ語とイタリア語の両言語において、等しい学力を身につけさせること」である。

ラディン語は幼稚園、小学校、中学校で必修となっている。幼稚園では、以前はラディン語で全ての活動が行われていたが、現在では3言語が使用されている。現在ボルツァーノのラディン語圏では、17の幼稚園に650人の園児が通う。クラス人数は最大25名で、正教員とアシスタントが2人で担当する。幼稚園は県立である。幼稚園から3言語を同時に導入するためには、子どもたちにとって視覚的にわかりやすい規則を決めておくことが大切で、そのために採用されているが、言語の色分けシステムである。緑がラディン語、黄色がイタリア語、赤がドイツ語と定め、園内の掲示物、カレンダー、予定表、絵本、教材、人形、教室に設けられた言語コーナーまで、全てが3言語を表す3色で色分けされており、園内の掲示物は全て3言語で書かれている。（幼稚園では識字教育は行わないが、日常的に文字に触れ、慣れさせるための方策である）この言語色分けシステムは、言語を分化する事が難しい幼稚園児から小学校の低学年児までに特に使用される。また、ボルツァーノでは幼稚園児用に開発されたポートフォリオ¹³⁾を使用している。以下に挙げたのは

11) 「ラディン語は、幼稚園で使用され、ラディン語地域の小学校で教えられる。ラディン語は教育の手段としても、全ての学校で使用される。ラディン語地区の学校では、授業はイタリア語とドイツ語にて同時間数行われ、同様の到達目標を目指す。」(1972年自治法第19条)

12) Intendenza Scolastica Ladina “La scuola Ladina” (2007 : 1)

ポートフォリオを使った一つの活動例で、自分が話せる言語を、塗り絵（写真1）を使って表現させ、言語に対して早い段階から意識づけをする活動を行っていた。



（上（緑）がラディン語、真ん中（黄色）がイタリア語、下（赤）がドイツ語）
写真1 園児が色を塗った人型（自分）

小学校では、イタリア語とドイツ語が週16時間ずつ、均等に教育言語として用いられるのが基本的な時間割であるが、クラスによって隔週ごとにドイツ語とイタリア語が入れ替わるクラスもあれば、單元ごとに入れ替わる場合もある。担当教員の話では週ごとに時間数を合算するのではなく、年間の授業時間数は、イタリア語とドイツ語で均等になるようにカリキュラムが組まれているとのことであった。

ラディン語は週2時間必修科目として教えられている。教科書はラディン語圏に共通のものであるが、バディア変種とガルデーナ変種の2種類が使用されている。「宗教」の科目では、單元ごとに3言語が交替で教育言語として使用されている。

表4 小学校の科目別週あたりの時間数

	時間数
宗教	2
ラディン語	2
ドイツ語	5
イタリア語	5
英語	1
数学	5
歴史、地理、科学	3
美術・音楽	2
物理	1
選択必修	1

出典：Intendenza Scolastica Ladina “La scuola Ladina”（2007：3）

13) ポートフォリオは、学習者にとって、言語使用や言語学習の実態を記録することによって、言語を学ぶ上で重要な「振り返り」の道具となり、自律的な学習を促すとされている。

また、4年生からは「英語」も週に2時間必修科目となっている。ラディン語はその他の授業でも補助言語として用いられる。

5年間の総学習時間¹⁴⁾はラディン語が340時間、英語は136時間となっている。イタリア語、ドイツ語は教科として782時間、その他に教科言語としてイタリア語とドイツ語を使用する時間の総数は各言語約1,000時間程度ある。このほかに各学校の自由裁量によって内容を決められる授業時間が4,522時間、またカリキュラムに追加可能な時間が170～340時間がある。これらの時間には、教科横断的な授業、プロジェクト学習、各種行事などに活用されている。

中学でもドイツ語とイタリア語で教えられる総時間数は同数であるが、全ての教科についてイタリア語とドイツ語が均等に配分されていた小学校とは異なり、中学では、表5のように教科ごとに教育言語が定められている。ラディン語は必要があれば、補助言語としてどの授業でも使用される。ラディン語と英語の授業は週に2時間、宗教の時間は、週2時間行われ、ラディン語、ドイツ語、イタリア語の3言語が使用される。ラディン圏の中学校では最近、後述する包括的言語教育の一環として地域の環境問題について学ぶ教科横断型、言語横断型の授業が導入された。この試みが成功すれば、このような言語横断型の授業がさらに増えることが予測される。中学卒業時には4言語での筆記試験と、複言語での口述試験からなる卒業試験が課され、落第制度もあるため、学生たちは全ての言語の習得にある程度真剣に向き合わざるを得ない。

表5 中学校の科目別週あたりの時間数

	時間数
宗教（ラディン語、イタリア語、ドイツ語）	2
ラディン語	2
ドイツ語	6
イタリア語	6
数学・科学	6
歴史（ドイツ語）	2
地理（イタリア語）	2
情報科学（ドイツ語とイタリア語）	2
美術（イタリア語）	2
音楽（イタリア語）	2
物理（イタリア語）	2
英語	2
選択必修	1

出典：Intendenza Scolastica Ladina “La scuola Ladina”（2007：5）

小中学校においては、教科としてのラディン語は週に2時間と多くはないが、宗教の時間には一部教科言語として使用され、また後述する「包括的言語教育」の授

14) Indicazioni provinciali per le scuole primarie e secondarie di primo grado delle località ladine (Deliberazione della Giunta Provinciale 27 Aprile 2009, n.1182)

業でも使用されており、授業でのラディン語使用は2時間以上確保されている。ドイツ語系、イタリア語系の生徒と違い、高校、大学と進学を希望するものは、ドイツ語、イタリア語いずれかの言語の学校を選択しなければならないために、言語を学ぶ動機も他の言語集団の生徒と比較して総じて高いものとなっている。中学の校長先生によると、ラディン語話者地域では、中学終了時の生徒のイタリア語とドイツ語のレベルはヨーロッパ言語共通参照枠（CEFR）でB2レベルであるという。

3.2 言語教育に関する満足度

ASTAT が2004年に行った言語意識調査¹⁵⁾によると、ラディン語系の学校の卒業者は、概ね、ラディン語系の学校の複言語教育には満足しており、ラディン語話者の97.9%が学校での第二言語の習得を肯定的に評価している。ドイツ語系では、78.5%、イタリア語系では68.6%が肯定的な評価をしており、グループ間の差は歴然としている。また同調査で「学校教育において、第二言語で表現できるに相応しい能力が身に付いたかどうか」を問う設問では、ラディン語話者では83.5%が肯定的に答えているのに対して、ドイツ語話者では53%が、イタリア語話者にいたっては32.1%のみが肯定的な回答をしている。均等型バイリンガル教育を行っているラディン語系の学校の第二言語習得に関する評価はかなり高く、均等型バイリンガル教育を行っていないイタリア語系、ドイツ語系学校では低い結果となっている。調査結果から、他の言語グループよりも、ラディン語話者のほうが自らの教育システムに対する満足度が非常に高く、授業を肯定的にとらえていることがわかる。反対にイタリア語系の住民は、満足度が低く、自らの教育システムに対してかなり否定的な評価をしており、この差は歴然としている。

3.3 学校教育における問題点

前述のように、ラディン語地域の学生数は2000人台と少ないため、中学を卒業してからのラディン語教育の継続性は大きな問題である。義務教育期間でのラディン語教育は、正規の科目として週2時間学ぶことが法律に明記されており、地域の高校においても週1時間が保証されているが、ラディン語話者が多く居住する地域には高校・専門学校が5校しかないため、地域外に進学する学生も多く、その場合、ドイツ語系、イタリア語系の高校・専門学校のいずれかを選ぶことになり、その時点でラディン語教育は終了してしまう。またラディン語地域の高校に進学しても、他地域からの学生が多数派となる場合もありえる。例えば、オルティセイ市内の芸術高校では、圏外からの通学者、特にドイツ語話者が3分の2以上を占めるため、クラスメートと日常的に使用する言語はドイツ語である。中学校までのように周りの生徒のほとんどが3言語話者という状況とは異なる言語環境に身を置くこととなる。ラディン語の授業は週に2時間あるが、そのうち1時間はラディン語を学んできた生徒を対象とした授業で、ラディン語で文学作品を読んだり、文法について学

15) ASTAT 2004

んだりと小・中から継続した内容の教育を受けられるが、もう1時間はラディン語圏外の学生も一緒に学ぶラディン文化入門的な授業であるため、ラディン語話者にとっては内容的に物足りなく、ドイツ語話者にとっては少し退屈な授業であるようだ。それまで地域の学校で大切に維持されていたラディン語であるが、高校・専門学校進学と共に、学ぶ事が難しい言語となってしまう。その代わりに、ラディン語系の学生は、他の言語グループの生徒と交わることによって、イタリア語やドイツ語のインタラクティブな能力が伸びる。

4. 欧州の複言語主義の体現者としてのラディン語地域

この地域のラディン語教育で特徴的なのは、ラディン語のみを単体で保護するのではなく、欧州の複言語主義という理念と合致させて、ラディン語をイタリア語とドイツ語と共に言語教育システムの中に組み込むことによって、ラディン語に未来と威信を与えている事である。ここ20年で欧州連合が深化し、複言語主義に基づく複言語教育が各国で推進されていく中で、ラディン語教育もその影響を受けて、意味付けも、教授法も変化しつつある。4章では、欧州の複言語主義、複言語教育を概観し、その実践的な活動例である「包括的言語教育プロジェクト」(Progetto della didattica delle lingue integrate)を取り上げ、欧州評議会の提唱する「言語と文化への多元的アプローチのための参照枠 (CARAP)」の理念がどのように実際の教育現場で反映され、どのような配慮・工夫がみられるかを分析し、地域語教育を含む言語教育にどのような効果をもたらしているのかを考察する。なお、現地の学校調査は2012年9月と2014年3月の2回にわたりオルティセイ市で行った。

4.1 包括的言語教育プロジェクト

複言語主義とは、欧州評議会が提唱する概念で、複数の多様な文化や言語が共存する社会を前提にしている。戦後まもない1947年に設立された欧州評議会は、加盟国間の人的交流を深化させ、相互理解を促進し、他者や多文化への寛容性を育み、平和を構築するため、設立当初より言語教育分野に強い関心を寄せている。2003年に欧州評議会言語政策局が示した「ヨーロッパ言語教育政策策定ガイド¹⁶⁾」では、複言語主義のための教育について、個人が家庭や社会や学校において、複数の言語を使用したり、学んだりする機会を得ることによって、「学校教育の早い段階から生涯にわたって個人の言語レパートリーを増やし、発展させることで、能力としての複言語主義を育成するための言語教育(国家語、外国語、地域言語)のことであり」と定義している。ラディン語教育委員会発行の小冊子“La Scuola Ladina”(2007:7)では「ラディン語系の学校は、少数言語の振興と複言語主義の推進、異文化に対するオープンさを旨とし、まさにヨーロッパ的な学校である」と、謳っており、幼稚園からの3言語による早期言語教育の実施、言語ポートフォリオの使用、

16) Guide for the Development of Language Education Policies in Europe from Linguistic Diversity to Plurilingual Education draft1 (rev) April 2003 (2003:16)

国家語のイタリア語、地域公用語のドイツ語のみならず、地域言語のラディン語も正規科目として教えているなど、欧州の目指す複言語で複文化を体現した学校であるという自負を持っている。

2003年から実験的に週1時間「包括的言語教育」の時間を幼稚園から中学校まで取り入れている。包括的言語教育とは、欧州評議会欧州現代言語センター「言語と文化の多元的アプローチのための参照枠」¹⁷⁾によると「同時に複数の言語と文化の変種を含む活動を行う教授法であり、言語を個別のものとして単体で教えるのではなく、多元的に教える方法」である。

この地域ではラディン語という地域言語、ドイツ語とイタリア語という大言語と、言語が複数存在しているからこそ、この学習方法が有効であるといえる。導入当初は母語（ラディン語）からその他の言語への橋渡しの困難さを解消するため、また様々な言語背景を持つ子どもたちの増加がきっかけとなり、実験的に試みられたのだが、現在では、教材開発や単元開発も進み、幼稚園の正規の活動や、小中学校の正規の授業科目としてラディン語圏全ての学校に取り入れられている。子どもたちは母語（既知の言語）を出発点に、複数の言語を観察し、比較・対照したり、分析したりすることによって、音や語彙や文法の相違に敏感になり、自発的に規則性を発見し、言語を相対化する能力が育成され、他の言語の習得が容易になる。また、同時に3言語を学ぶことにより、言語間の優劣を感じず、それぞれの言語が同じ価値を持っていると子どもは認識する。母語（ラディン語）に対する誇りや、他の言語を尊重する姿勢が育つ。学校、社会、家庭における複言語使用は「問題」ではなく「豊かさ」として捉えられる。オルティセイ小学校の副校長先生によると、このアプローチは、ラディン語、ドイツ語、イタリア語の習得のみならず小学校4年生から開始される英語学習を導入する際にも応用され、また、移民の子どもたちの母語の尊重という側面も持っており、社会包摂の観点からも有効であるという。

4.2 小学校での識字教育

では、このような多元的アプローチはどのように実践面で生かされているのだろうか。ここでは、ガルデーナ溪谷の中心的な都市であるオルティセイ市内にあるオルティセイ小学校1年生の3言語での識字教育を例に、どのように包括的言語教育が行われ、何を重視して授業を行っているのかを観察する。このアプローチが導入される以前は、1年生に入学するとドイツ語かイタリア語のいずれかによる識字教育を行い（ガルデーナ溪谷ではドイツ語を、バディ溪谷ではイタリア語での識字を優先する傾向があった）ラディン語は必要に応じて補助的に使用されるのみであったのだが、現在では、上記のアプローチにより3言語の識字を同時に導入する方法を採用している。開始当初は、3言語を一斉に学ばせる事に対して、児童が混乱してしまうのではないかとという保護者からの懸念もあったが、現在は教育効果を実感

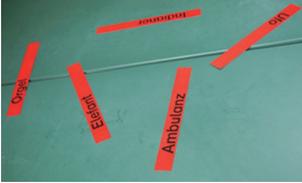
17) Candelier, M. 編 (2008: 68). CARAP-Cadre de référence pour les approches plurielles des langues et des cultures. Strasbourg: Centre Européen pour les Langues Vivantes / Conseil de l' Europe, 2007: 8

していることから反対意見はない。オルティセイ小学校の副校長先生によると、一つの具体的な成果としては、この方法でアルファベットを学んだラディン語母語話者の子どもたちは、初めて自分の家族に手書きのメッセージを書く課題に対して、3言語で識字教育がなされているにもかかわらず、好んでラディン語でメッセージを使用するようになったという。

表6 小学校1年生の識字教育（オルティセイ小学校）

テーマ	「3言語の母音（文字と発音の対応）の導入」 —言語の規則性を学ぶ —それぞれの言語の母音の発音の違いを学ぶ —文字と音の対応を学ぶ —言語間の相違に意識的になる
日時	2012年9月（新学期は9月5日からスタート）3回目の授業
学年	1年生
クラスの人数	17人（内、外国人生徒数：2名）
教員	3言語話者の地元出身教員
教授言語	3言語（ラディン語、ドイツ語、イタリア語）
子どもたちの言語背景	家庭での言語使用は様々であるが、全員地元の幼稚園に通園し、3言語での活動を行ってきた。それぞれが得意な言語で発言し、教員はどの言語の使用も押し付けない。
教材	大判の絵カード5枚 3色（ラディン語、ドイツ語、イタリア語）の単語カード 5つの単語×3色=15枚

表7 授業の進め方・観察

全体 (カードを真ん中に並べて、クラス全体で輪になる)	<p>①一つひとつの母音と単語について3言語で発音練習（教員主導）。 ②次に児童に母語や得意な言語で発音させる。 ③今度は母語や得意な言語で単語を言わせる。</p>  <p>※母語や得意な言語を尊重する</p>
	<p>①机上にランダムに並べられた言語ごとの単語カードの中から、子どもたちは自分の得意な言語のカードを1枚とる。</p> 

小グループ	<p>②異なる言語で同じ意味の単語カードを持つクラスメートを見つけ、単語と一致する絵カードを基にグループを作る。</p>  <p>③3色（3言語）の単語カードを比較し、それぞれの単語の相違点について話し合う。 例：「ラディン語とイタリア語では単語は小文字で始まるけれど、ドイツ語は大文字で書かれているね！」など。</p> <p>④グループごとに話し合ったこと、発見したことをそれぞれ発表し、クラスメートと共有する。</p>
-------	--

授業を観察して得られた知見は、第一に、子どもたちが自分自身で、複数の言語を比較、観察して、話し合い、言語の規則を自ら発見させるプロセスを大切にしていることである。このような訓練を積むことによって児童は自律的に第二言語、第三言語を学ぶようになるという。第2に、児童によって各言語の能力がまちまちであるので、それを生かしたグループワークを大切に、与えられた課題を他の児童と協働して取り組むことが求められる点である。第3に、体を動かす作業（立つ、歩く、しゃがむ、取る）を取り入れ、一つの活動を長く行わない点である。これは子ども達の集中力への配慮であり、体を動かす作業を入れる方法は中学1年生の授業でも観察できた。第4に、児童が自信をもって発言できるよう、教員は使用する言語を限定したり、強要したりせず、学習者の母語や得意な言語を尊重していたことである。移民の子どもたちに対しても同様に「Kくんは、アルバニア語とドイツ語ができるのよ」など、子どもたちの自尊心を高め、母語に対して周囲から承認が得られるよう教員が支援し、ラディン語もドイツ語もイタリア語も、その他の言語も同等の価値がある事を強調していた。

4.3 教 員

これらの実践面を支える上で重要なのは、3言語能力を持つ教員と、適切な教材、教員養成、外部の専門家による協力体制である。教員養成はラディン語教育・複言語教育の要である。以前はボルツァーノ市には大学がなかったため、教員になるためには、イタリアかオーストリアの大学の教員養成課程で学ぶという選択肢しかなく、教員になってから、ラディン語教育研究所等が主催する教員向け研修などを受けるしかなかったが、1997年以降はボルツァーノ自由大学が開校したことにより、現在は教育学部（ブレッサノーネ市）でラディン語系学校の教員養成が行われ、地域の実情にあった教員養成が行われている。教職課程ではラディン語文学・ラディ

ン語の歴史・ラディン語教授法、3言語による識字教育の導入法などについて実践的に学べ、ラディン語は選択必修となっている。専任教員が1名、任期付き教員が1名、非常勤講師が数名の体制でコース運営にあっている。学生は在学中に現地の学校で教育実習を受けることが可能である。ラディン語系の学校ではトリリンガル試験に合格した現地の事情に精通した地元出身の教員が優先的に採用される。また、教員に対する研修制度も充実しており、校内研修の他、ラディン語教育研究所、ボルツァーノ自由大学が定期的に研修を開催している。教材開発に関しては、ボルツァーノ自由大学や、ラディン語教育研究所の専門家から理論的、科学的アドバイスを得ながら、学校同士が連携しつつ、各教員が積極的に行っていた。

4.4 ラディン語話者の言語能力と教科学力

このような複言語教育地域で、よく議論されるのが、多くの時間が言語教育に費やされることによって、全体的な学力の低下を招くのではないかとという点である。

ボルツァーノ県では、イタリアの他の地域とは異なる教育システムを採用しているために、それぞれの言語グループ別の教育効果について様々な尺度から評価される機会が多い。

例えば、2012年に高等学校・高等専門学校¹⁸⁾の2年生の生徒に対して行われたPISA¹⁸⁾ (Programme for International Student Assessment) の結果によると、ラディン語系の学校に通学する生徒は、言語面のみならず、教科(読解、数学)でも、同県の他の言語グループ、イタリア平均、OECD平均と比較しても、好成績を収めている。(表8)

表8 2012年 PISA の結果

	読 解	数 学	自然科学
OECD 平均	496	494	501
イタリア平均	490	485	494
南チロル平均	497	506	519
ラディン語系	513	523	513
ドイツ語系	503	513	530
イタリア語系	474	483	483

出典：<http://www.invalsi.it/> を参考に筆者が作成

一方、ラディン語系住民の言語能力はどうであろうか。ここでは、一つの指標として、県が実施しているバイリンガル試験¹⁹⁾・トリリンガル試験の結果を挙げる。

18) ボルツァーノ県では、イタリアの他州とは異なる教育体制を採用しているため、教科の習得状況に関して、他の地域との比較、県内の3つの教育制度の比較が定期的に行われている。

19) 1976年7月16日 共和国大統領令 第752条。2010年以降は、この試験の代替としてドイツ語に関しては、ゲーティンステイテュートの検定試験やオーストリアのOSD、イタリア語に関しては、CELI、CILS、PLIDAなどの語学検定試験も認められるようになった。また、ボルツァーノ自由大学、クラウディアナ高等衛生学校、インスブルック大学法学部バイリンガルコース卒業資格はAレベルに相当すると認定されるようになった。

この試験は、地方公務員を目指すものには必須の語学試験であり、難易度別に、D、C、B、Aの4段階があり、それぞれCEFR²⁰⁾のA2、B1、B2、C1に相当する。どのレベルにおいても、ラディン語系の受験者の合格率が圧倒的に高い結果となっている。

表9 バイリンガル試験の合格率

	2005年度バイリンガル・トリリンガル試験合格率
A	全体 (55%) / ラディン語圏 (77.7%)
B	全体 (28.1%) / ラディン語圏 (65.4%)
C	全体 (39.3%) / ラディン語圏 (84.3%)
D	全体 (82.4%) / ラディン語圏 (100%)

出典：ASTAT nr. 13 (2006.5)

PISAの結果や、バイリンガル試験の成績は毎回、地元メディアでも大きく取り上げられ、言語グループごとに比較されて報道されるため、ラディン語系話者にとっては自らの言語教育や教育システムに対する自信につながっており、その一方で、イタリア語系グループにとっては自らの学校制度に対する不信感や不満につながっている。

5. まとめと課題

2つの大戦を通し、イタリア語化、ドイツ語化政策の圧政の下に翻弄されたボルツァーノ県のラディン語地域は、その苦い経験を経て、第二次世界大戦後、地域の優勢言語への同化を回避し、ラディン語の文化・伝統と言語を次世代に繋げていくため、ドイツ語とイタリア語を均等に学校カリキュラムに取り入れ、さらにラディン語の授業も正規科目として導入した。

欧州の拡大・進化に伴い、母語プラス2言語の習得がEUの教育政策の優先課題の1つとなった現在、ラディン語地域の「地域言語プラス2言語」の複言語教育は、60年に渡る知見の蓄積があり、また先駆的な多元的アプローチ、特にCARAPで提示された「包括的言語教育」を実践している地域として、近隣諸国から学校視察団が度々訪問するほど注目を浴びるようになり、また、言語面のみならず学力面でも他の言語集団と比較して成果を上げていることが、教員の誇りや自信、子どもたちの複言語の学習に対する動機付け、保護者の理解の促進につながっている。

ボルツァーノ県では、前述の通り、言語集団別に3つの教育制度と3つの学校があり、グループ間での交流が少ない現状に対しては、隔離政策であるとの批判も多い。しかしながら、お互いの言語集団がよきライバル関係を築き、切磋琢磨しているというプラスの面もある。メディアでは教育の成果や全国試験の結果、新しい試

20) ヨーロッパ言語共通参照枠 (Common European Framework of Reference for Languages) 言語学習者の学習到達度を示す際に用いられる指標。

みなどが常に比較されて報道され、否が応でも他のグループの動向を意識せざるを得ない状況にある。学力的にも言語的にも他の2言語のグループよりも、よい結果を出しているラディン語系の学校教育は、ボルツァーノ県内のドイツ語話者集団、イタリア語話者集団にとっても刺激となり、相乗効果を生み出している。イタリア語系学校でも、ここ10年ほど、言語教育のテコ入れがテーマであり、保護者からの要望が多いことから、ラディン語地域の教育の手法を一部取り入れ、ドイツ語・イタリア語のバイリンガル教育がいくつかのパイロット校で実施されるようになり、教育効果を上げ始めている。母語維持のためにドイツ語による教育を頑なに守ってきたドイツ語系学校でもイタリア語を教科の授業言語として取り入れる事が議論されるようになった。このようにラディン語地域の複言語教育への取り組みは、ボルツァーノ県全域にじわじわと拡がりを見せている。全体の人口比では5%にも満たない少数派の中の少数派と呼ばれるラディン語系集団ではあるが、言語教育に関しては、他の言語グループを牽引する役割を担うようになっている。

経済的に豊かなこの地域は、移民労働者を惹きつけ、近年、移民の数が増加しつつある。ASTATの2013/14年度のデータによると、現在ラディン語系の小学校に通う外国人の子弟は他の言語グループと比較すると4.6%と多くはないが（イタリア語系学校では22.7%、ドイツ語系では7.1%が外国人子弟）今後の課題としては、人口動態の変化により移民の子弟やそれ以外の言語グループの子弟が増え、ラディン語母語話者の割合が相対的に減少した場合にも、現在と同様の複言語教育の制度を維持し続けることが可能なか疑問も残る。またドロミテ山脈が世界遺産に登録されたこともあり、国際的な観光地としての知名度が上がる中、英語の需要も着実に増加しており、小学校4年生から英語教育も導入されている。複言語は地域言語が生き残りのための武器でもあるが、今後、英語の需要が増えてきた際に、柿原（2011：95）が指摘するように、教育媒介言語としての英語を大規模に導入するきっかけを作ってしまう可能性もあり、少数言語を保護するのではなく逆行させる危険性も孕んでいる。それでもなおラディン語を維持できるのか、少数言語にとってはEUの複言語教育は諸刃の剣になる可能性もある。このように社会が変容する中で言語教育に対する要望（特に英語）が変化していく可能性もあり、その場合、絶妙なバランスの上に構築されている母語プラス2言語教育のシステムが崩れてしまう可能性も否めない。

今後の課題は、ボルツァーノ県内の他の言語グループとの協力関係・連携強化である。3言語グループ別の教育委員会の連携に関しては、言語ポートフォリオ開発や、共通の歴史教科書の編纂などが行われており、一定の成果は達成しているが、複言語教育がお互いのグループの歩み寄り、相互理解に繋がるように、さらに他の言語グループの学校との交流、共同プロジェクトの推進などを活発化させて行く必要がある。また包括的言語教育に関しても、3言語を比較して学ぶだけではなく、それぞれの文化、文学作品、歴史、建築などを比較し、学び合うような授業が展開されるようになると、さらに言語グループ間の相互理解が深まり、学習が深化するのではないかと考える。

付記

本稿は、平成24年度特定研究資金「科研費基盤研究 A『外国語一貫教育における複言語・複文化能力育成に関する研究』（課題番号 H12103）」（研究代表者 境一三（慶應義塾大学））に助成を受けた研究成果の一部であり、2011年9月、2014年3月のボルツァーノ県の Ortisei (St.Ulrich / Urtijei) 市で行った現地調査・視察に基づいている。調査研究メンバーには様々な助言を頂いた。また、現地では、ラディン語教育研究所の Roland Verra 所長、幼稚園統括本部 Hannelore Insam ディレクター、オルティセイ小中学校 Kostner Maria 校長、Lardshneider Flavia 副校長、オルティセイ芸術高校 Elisabeth Baur 校長、ボルツァーノ自由大学 Siegfried Baur 教授他、教育実践の場での貴重な情報・意見を頂いた。以上、記して深謝したい。

参考文献

- アジェージュ、クロード・糟谷啓介訳（2004）『絶滅していく言語を救うために——ことばの死とその再生』白水社
- 大澤麻里子（2000）「ボルツァーノの言語状況」『東京大学言語情報科学研究 第5号』東京大学言語情報科学研究会
- 柿原武史（2011）「マイノリティ言語話者にとって「複言語」教育とは何か」『ことばと社会 13号』三元社
- ジャコムツィ、ペーター（2002）「多言語状況におけるテクスチュアリティの政治学——南チロルに生きた『間文化性』」『シリーズ言語態6 間文化の言語態』東京大学出版会
- ラウト、ギュンター・山川和彦訳（2005）「多言語地域における共存」『ことばと社会9号』三元社
- 山川和彦（2002）「トレンティーノ・南チロル州特別法改定と言語集団規定」『麗澤大学論集 第13巻 2002年2月』麗澤大学
- 山川和彦（2005）「第8章イタリア／解説：パリ協定およびトレンティーノ・アルト アジージュ特別法」渋谷謙次郎編『欧州諸国の言語法』三元社
- 山田敏弘（2009）「ロマンシュ語母語教育の現状と課題」『岐阜大学教育学部研究報告 人文科学 第57巻 第2号』岐阜大学教育学部研究報告紀要
- ASTAT（2004）*Barometro linguistico dell'Alto Adige 2004*.
- Indicazioni provinciali per le scuole primarie e secondarie di primo grado delle località ladine（2009）Provincia Autonoma di Bolzano-Alto Adige.
- Ellecosta, Lois（2007）*La Scora Ladina*. Comitato Provinciale per l' Evaluaziun di sistem scolastich ladin.
- Provincia Autonoma di Bolzano（2013）*Aules*. Provincia Autonoma di Bolzano.
- Rifesser, Theodor（1994）*Un tetto per tre lingue*, L'ordinamento scolastico nelle scuole delle valli ladine della Provincia Autonoma di Bolzano.
- Ufficio Cultura e Scuola Ladina（2006）Profili storici della scuola ladina in Provincia di Bilzano contribuiti nell' ambito della Giornata della cultura ladina 2004, Bolzano.
- Roland Verra（2000）*La minoranza ladina*, Istituto Pedagogico Ladino.
- Roland Verra（2003）*Pluriilinguismo e Scuola Ladina*, Intendenza Scolastica Ladina
- Roland Verra（2007）Cenni di Storia della Scuola Ladina, *La Scora Ladina*, Comitato Provinciale per l' Evaluaziun di sistem scolastich ladin.

参考 URL

- <http://altoadige.it>: アルト・アジェージュ紙
- <http://www.provincia.bz.it/EBT/>: ボルツァーノ県
- <http://www.unibz.it/en/public/university/>: ボルツァーノ自由大学
- <http://www.unesco.org/new/en/culture/themes/endangered-languages/> ユネスコの危機言語
- http://ec.europa.eu/languages/policy/language-policy/regional_languages_en.htm 欧州評議会
- http://www.pedagogich.it/index_it.html ラディン語教育研究所

執筆者紹介

大澤麻里子 学術修士、麗澤大学非常勤講師、東京大学特任講師。
 主要論文：「ボルツァーノの言語状況」『東京大学言語情報科学研究 第5号』東京大学言語情報科学研究会（2000）、「新たな共生時代への模索——イタリアのボルツァーノ県を事例に」麗澤大学紀要、第91巻（2010）。